

端部上皮性異形成の評価において近年各分野で提唱されている扁平上皮内腫瘍(SIN)の分類を準用し外科的切除を行ったT1・T2舌扁平上皮癌を対象に臨床病理組織学的検討を行った。

【対象・方法】1995年1月から2006年6月までに原発巣根治切除を行ったT1・T2舌扁平上皮癌34例を対象とした。上皮異形成の分類に関しては日本口腔腫瘍学会の「舌癌取り扱い指針」SIN分類を準用した。

【結果】34例中切除断端部に上皮性異形成を認めた症例が16例であった。このうちSINに該当する症例は10例で再発が4例であった。再発した4例は2例が表層分化萎縮型2例が表層分化肥厚型であった。

【結論】切除断端部上皮性異形成の予後判定にはSINの分類が有用である可能性が示唆された。

#### 4 当院口腔外科における舌癌症例の臨床的検討

齋藤 正直\*・小林 孝憲\*・\*\*\*  
 星名 秀行\*・永田 昌毅\*・藤田 一\*  
 新垣 晋\*\*・斎藤 力\*\*  
 朔 敬\*\*\*・高木 律男\*  
 新潟大学大学院医歯学総合研究科  
 顎顔面口腔外科学分野\*  
 同 組織再建口腔外科学分野\*\*  
 同 口腔病理学分野\*\*\*

【緒言】舌は言語や摂食・咀嚼・嚥下、味覚、審美的要素、愛情表現など、重要な機能が多く、治療方法の選択や、切除範囲の決定、再建方法には慎重な診断とQOL維持のための配慮が必要である。

【方法】新潟大学医歯学総合病院口腔外科開設以来1967年8月から2007年4月までの40年間を10年毎に、第I期から第IV期にわけ、舌癌一次症例260例の臨床所見や治療法の変遷、予後を検討。また、治療成績については根治的治療を行った231例を対象とした。

【結果】症例は男性が152例、女性が118例。平均年齢は全体60.8歳。好発部位は舌縁部。病期分

類はStage I, Stage IIの早期例が多く、近年では、Stage 0症例の増加を認めた。原発巣の治療法は化学療法群、放射線群、手術群、手術・放射線群と分類。5年累積生存率を、Kaplan Meier法を用い、年代別、治療法別、病期分類別で生存率を検討した。年代別では第IV期、第I期、治療法別では手術群、病期分類別では、Stage 0, I, II期が良好な治療成績であった。

#### 5 導入化学療法により喉頭温存が可能であった下咽頭進行癌症例

佐藤雄一郎・窪田 和

県立がんセンター新潟病院耳鼻咽喉科

下咽頭癌は自覚症状を呈しにくいため初診時に進行癌であることが多い。治療成績もstage III, IV症例の5年生存率が約20～30%と予後不良の疾患である。下咽頭癌進行例の外科治療は下咽頭喉頭全摘、遊離空腸による咽頭食道再建という拡大手術で術後は喉頭喪失による発声機能障害、再建空腸の形態や蠕動運動による嚥下障害に悩まされる症例が多い。つまり本疾患の治療では生存率向上と喉頭機能温存の両立が重要な課題である。機能温存の代表は放射線治療だが腫瘍の放射線感受性を事前に判定できれば進行例であっても手術を回避することが可能になる。当科では下咽頭進行癌の治療方針決定に際し喉頭温存可能例を選別するための導入化学療法を検討することが多い。今回われわれは導入化学療法(TPF療法)が著効したため原発巣は放射線化学療法、頸部リンパ節転移には頸部郭清術を併用することで喉頭温存が可能であった症例を経験したので報告した。

#### 6 がんセンター新潟病院における転移性腎細胞癌患者の survival の検討

若月 俊二・北村 康男・斎藤 俊弘

小松原秀一

県立がんセンター新潟病院泌尿器科

転移性腎細胞癌患者(淡明細胞癌の組織型)の癌特異的生存は以前より転移が生じてから平均1

年の生存期間とされており (Leibovich ら J Urol. 2005), サイトカイン療法の導入後もあまり, 変わらない。しかし, 本邦では欧米の報告に比べ, 転移してからの予後は, それほど悪くない印象がある。新潟大学とその関連施設で行っているサイトカイン療法を行なった転移性腎細胞癌患者の平均生存期間は約 440 日あった。そこでインターフェロン  $\alpha$  による adjuvant immunotherapy が主体の当院での転移性腎細胞癌症例の癌特異的生存について, 検討を行なった。

【対象と方法】1990 年から 2005 年の 16 年間に腎摘を行なった腎細胞癌症例 521 例のうち, 腎摘時からの転移症例 53 例, 観察期間中に転移が生じた症例 86 例であった。

【結果】初診時転移症例の生存率は 1 年; 58%, 2 年; 38%, 再発症例では 1 年; 71%, 2 年; 57.5%, であった。

【考察・結論】我々の検討では欧米の報告に比し, 良好な生命予後の結果が得られた。

## 7 前立腺癌生検病理診断の ISUP のコンセンサスに基づく Gleason score の再評価と臨床的リスクに及ぼす影響

若生 康一\*・\*\*・川崎 隆\*  
原 昇\*\*・梅津 哉\*・西山 勉\*\*  
内藤 眞\*・高橋 公太\*\*  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
細胞機能講座分子細胞病理学分野\*  
同 腎泌尿器病態学分野\*\*

【目的】Gleason score の新しい診断基準である ISUP (The 2005 International Society of Urological Pathology) Gleason grading system とこれまでの診断基準 (Original Gleason grading system) を比較し, ISUP Gleason grading system が患者の治療選択に及ぼす影響を調べる。

【方法】2004 年及び 2005 年の 2 年間に新潟大学医学部付属病院で 168 名の患者に対し経直腸的前立腺針生検が行われそのうち 89 例が前立腺癌と診断された。これら 89 例の Gleason score の診断を次の 3 グループに分け行なった。Diagnosis A;

Original Gleason grading system に基づく General pathologists による診断, Diagnosis B; Original Gleason grading system に基づく Single pathologist による診断, Diagnosis C; ISUP Gleason grading system に基づく Single pathologist による診断。また, Diagnosis A, B, C を Kattan の nomogram に当てはめた場合の根治的前立腺全摘除術, 体外照射療法, 小線源療法における 5 年 PSA 非再発率を比較した。

【結果】Gleason score, primary Gleason pattern のいずれにおいても Diagnosis C において Diagnosis A 及び Diagnosis B に比較し grade が上昇した。Diagnosis A 及び Diagnosis B の Gleason grade の間に有意な差はなかった。また Kattan の nomogram に当てはめた場合, 根治的前立腺全摘除術, 体外照射療法, 小線源療法の全てにおいて Diagnosis C による 5 年 PSA 非再発率が Diagnosis A 及び Diagnosis B の場合に比較し有意に低下した。

【結語】ISUP Gleason grading system は watchful waiting も含め患者の治療選択に大きな影響を与えるものと考えられた。

## 8 子宮頸部腫瘍における Human Papillomavirus (HPV) 検査の意義

児玉 省二・小島 由美・笹川 基  
本間 滋  
県立がんセンター新潟病院産婦人科

【目的】子宮頸部の細胞診に HPV 試験を併用し, 診断的意義を明らかにすること。

【方法】子宮頸部のがん検診希望者, 二次検診紹介者, 異形成で定期的な観察者を対象とした。HPV・DNA 検査は, ハイブリッドキャプチャー法 (中-高リスク型 13 種類) で検索した。

【成績】HPV 検査陽性は 1351 例中 27.9% で, その内訳はがん検診希望者 812 例中 5.5%, 二次検診紹介者 297 例中 73.7%, 異形成観察者 242 例中 46.5% であった。HPV 陰性 974 例のうち, 異形成 33 例, 上皮内癌 6 例, 浸潤癌 7 例 (腺癌 5 例, スリガラス細胞癌 1 例, 扁平上皮癌 1 例) で